南十字星

大阪大学外国語学部
（旧大阪外国語大学）
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語同窓会

2009 年春　第 8 号
発行　南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402
電話 Fax　072-753-1693
Email　rocky3@wombat.zaq.ne.jp

人生は出愛、ふれ愛、助け愛

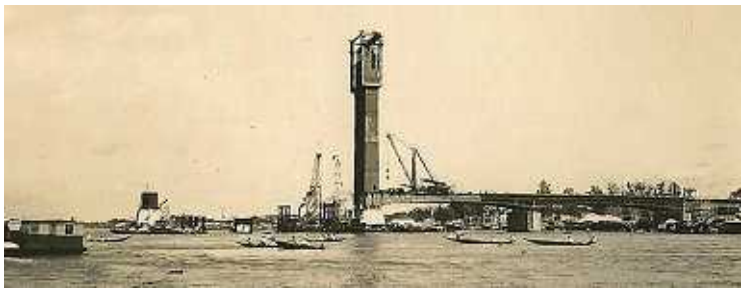
小原　一浩　（'63 卒）

古希を迎える歳になって、人生は偶然の出会いによって決まるものだと実感しています。出会いが運命だと考えてもよいと思っています。

幼年時代に、迷子になった時のために教えられていた住所が「天王寺区上汐町 4 丁目 36 番地」。そばに「生国魂神社」がありました。実はその近くの「上八」に偶然、制服が恰好の良い「大阪外国語学校」があったのですが、当時は知らず、随分後で母から聞きました。

中学時代からアジアに強い関心を持っていました。大学進学のさい「貿易相手国として、これからはインドネシアだ!」と同級生と話し合い、迷わずに外大インドネシア語学科を受験しました。その年の競争率は 15 倍強（実質は 10 倍弱）。無事に合格し、入学後 4 年間を、専攻とワンダーフォーゲル部との 2 本立てで過ごしました。

就職する時期になって、インドネシアへ行ける会社への就職を第 1 に考えました。大阪に本社のある N 商社の内定を辞退し、当時スマトラ島で橋梁工事を施工していた富士車両に入社しました。同社は早くから東南アジアへ進出し、タイのメナム川に架かる 3 橋梁、カンボジアのトンレサップ湖の橋も建設していました。そして、日本の戦争賠償の 1 つとして巨大な橋の建設工事を受注していたので、インドネシアへ行ける絶好の会社だったのです。



チャンスは程なくやってきました。その頃、海外に出かける日本人はごく少数で、航空運賃も高額。当時の日本-パレンバン間の往復の航空運賃は 20 万円で、初任給の 10 ヵ月分。現在のパック料金と比較すると隔世の感があります。

1963（昭和 38）年 11 月 23 日、日米間の衛星放送が始まった日に、米国のケネディ大統領が凶弾に倒れたとのニュースを聞き、多少緊張しながら羽田空港を後にした日を忘れることは出来ません。途中、機上から眺めた海は、まさに夢にまで見た「赤道直下に散りばめられたエメラルドの帯」そのもの。しかし、空調の利いた機内から出た途端、ジャカルタの蒸し暑さには閉口しました。

工事は南スマトラ州都のパレンバン市を流れるムシ川に橋梁を建設するものでした（写真㊦）。パレンバン市には石油の精製工場があり、太平洋戦争の初期に日本軍の落下傘部隊が降下した街として有名でした。富士車両がメインコントラクターで鋼橋を製作し、サブコントラクターの大林組が下部工事（橋脚）と架設工事を担当していました。ムシ河は水量が多く、特に橋脚工事は難工事でした。

私の業務は事務方で、プロジェクト事務所への現地調達資材の供給要求や日本からの材料・機材の通関手続きその他でした。ニチメン実業からの駐在員と 2 人で担当していました。何しろ、建設現場ですからいろいろな出来事が起こります。日本人でも気の荒い連中が大勢いました。いざこざは絶えず、警察署やプロジェクトとの交渉も仕事の一部でした。

愛用したトヨペット車と

おかげで、私の度胸も付きました。契約上、公式のやり取りは英語でしたが、日常はインドネシア語。英語とインドネシア語と日本語の同時通訳時には、スムーズに言葉が出ずに困ったこともありました。言葉の調子は日によって好不調があるようです。それでも、このような体験を通して英語とインドネシア語が結構こなせるようになり、その後のサラリーマン生活に大いに役立ちました。現地で取得した自動車の運転免許は、今でも日本で大型免許書として大いに活用しています。ゴルフは、近くにコース（PGC）がありプレイする機会には恵まれていましたが、もう少し「コン」をつめてやっておけば良かったのにと思っています。

パレンバン滞在中で一番大きな出来事は親日派だったスカルノ大統領が65年の「9月30日事件」で失脚したことです。大統領の娘婿殿のスクリスノ氏も同じプロジェクトのインシニュールだったので余計に驚きでした。当時、大統領はインドネシア共産党と軍部に跨って政権を担当していたようです。共産党は非合法ではなく、記念日には各地で「鼓笛隊」を組んで闊歩していました。数日間は何が起こったのか定かでなく、ラジオ放送だけが頼り。程なく6人の陸軍の将軍が親衛隊員であったウントン中佐の率いる仲間に殺害されたことが分かりました。空軍の一部と大統領親衛隊なども絡んでいたようです。暴動を起こした共産党(PKI)を追った戦略予備軍のスハルト司令官が、代わって大統領を務めました。

5年後に旅行で行った時に、PKI党員に対する弾圧が激しかったことを知人から聞かされました。スハルト氏が大統領に就任したのは、本能寺の変の後、直ちに引き返した羽柴秀吉の例とよく似ています。敵を一番早く倒した人が主導権を握るのでしょう。その後、スハルト大統領は長期間政権を担当し、インドネシアの開発を手がけた功労者でした。

㊤登山仲間と旅行したプランバナンで　㊨は3冊の著書

さて、私は橋の引き渡しの後、足かけ3年間の赴任を終えました。帰国してからは、会社で開発部に所属して新製品を担当することになりました。滞在当時から法律の重要性を感じていたので、大阪市立大学の法学部へ学士入学。引き続いて商学部へ再度学士入学しました。都合6年間に亘って会社勤めの傍ら夜の講義に通ったのは、好奇心と同時に人と違ったことをしてやろうという気持ちがさせたものでしょう。この学士入学制度の存在はその後の私に少なからぬ影響を与えました。

東京へ赴任していた時には「放送大学」で4年間学習しました。そして、名古屋勤務・本社の総務部勤務などを経て定年退職を迎えました。海外業務担当の時に、東南アジアや欧米に頻繁に出張したのは、外大卒業という必然（？）でした。同級生松岡正勝君の妹さん（好美）を伴侶とし、岳父・好勝氏もまた外語の第1期卒業生です。

定年前に自費出版した「好奇心こそ我が人生の原動力」は、藤原剛先輩の勧めによるもので、推薦状も書いて頂きました。退職後は自己実現の欲求を満たす世界で地域のボランテイア活動に積極的に参加。「NPO法人ふれ愛さやま」を設立してからは生涯現役の実践。現在は活動の一環として「訪問介護」や「まちづくり」などに精を出しています。限りある自分の時間を有効に使い切りたい思いで一杯です。既に「男の遺言状」は上梓しました。

インドネシア駐在生活から40年が経過しましたが、多くの思い出が鮮明に残っています。日本人に好感を持っていた素晴らしい人達に巡り合えたのは、若い頃の貴重な体験でした。今でもこの国のことが特に気にかかります。はっきり言ってインドネシア贔屓です。

1昨年、金剛登山仲間をガイドして行った10年ぶりのバリ島で、南十字星を仰ぎ見ました。わが人生、振り返ってみたら原点には「外大・インドネシア語」があり、私の心の中には「南十字星」が燦然と輝いています。

寄稿　Apa & siapa

インドネシアでの
工場建設に携わって

松本 加央里（旧姓内倉 '00 卒）

04年の大統領選投票場で。選挙権はないけれど、許可を得て撮影…

私は2000年9月から2005年2月までの4年5ヵ月の間、インドネシアの西ジャワ州カラワン県にある工場で勤務していました。2000年3月に大学を卒業後入社した会社（株式会社イーパック）がこの年、初めての海外工場としてインドネシアに工場を設立することになり、その立ち上げの1スタッフとして赴任しました。工場は高層ビルが立ち並ぶジャカルタの中心部から東へ車で約1時間。あたりは田んぼ、牛やヤギが徘徊しているのどかな風景に変わります。日系企業も多く進出しているスルヤチプタ工業団地(写真㊦)が広がり、そこに私が勤める工場PT.E-PACK INDONESIAがあります。

赴任して最初の仕事は、現地従業員（作業員）の採用でした。採用枠は20人程度でも、応募者は殺到。簡単な筆記試験に合格した40～50人に対し面接と通訳です。当時まだ職務経験もろくにない私には大仕事でした。地元の若い応募者達もほとんど外国人と会話したことがなく、しかも容赦ないスンダ語訛りのインドネシア語。聞き取るのに悪戦苦闘し、相手も日本人が話す怪しいインドネシア語を理解するのに苦労したようです。

学生時代、インドネシア大学に留学。その間、知り合いのインドネシア人の家庭でホームステイしていたこともあり、多少の会話は問題ない、と思い込んでいたのですが、早速言葉の壁にぶち当たりました。

従業員も決まり、工場が稼働しはじめると、工場内の通訳・翻訳業務に加えて、経理や輸出入業務や在庫・生産管理業務も行いながら、慌ただしくも充実した日々を送りました。日本人は、私と取締役の上司と2人だけ。通常ならインドネシア人スタッフがこなす業務も、私が担当せねばなりませんでした。大変だったとはいえ、実務経験を積む上ではとても良い勉強になりました。

インドネシアの会社・経営に関係する法律を勉強し、把握することも大事な仕事でした。特に税務・労務・輸出入に関する、工場を運営する上で重要な法律は頻繁にかつ突然通達されます。基本的には外部のコンサルタントの方からアドバイスを受けていましたが、とまどうことも多々ありました。

また、会社自体が初めての海外進出であったため、日本とインドネシアの経営上の感覚のギャップを埋めることにも気を使いました。日本では考えられない社会的習慣や“暗黙のルール”のようなものがあり、理解・納得してもらうために、いかに上手く伝えるか。インドネシア工場に日本式の能率的手法をどう反映させるか…。時々日本人の上司と晩ご飯（とビール）を共にしながら、よく語り合いました。

試行錯誤しながら、工場は順調に稼働。5年目には第3工場まで拡大することができ、その頃私は日本に戻りました。帰国後約4年となりますが、今も同じ会社で、今度はインドネシア工場向けの資材の輸出や製品の輸入などの業務を担当しています。

現地を離れた今、自分がしてきたことの反省点もよく見えます。基本的な実務の下積みをしながら、会社・工場の経営の一部に携わり、貴重な経験ができたと思っています。設立当初採用した従業員は、工場の核を担う社員に成長しています。私の現在勤める千葉工場では、現地のインドネシア人従業員を研修生として日本に呼び寄せ、日本語や技術、管理手法などを1年間学び、帰国後にその経験を生かして活躍している社員もいます。会社自体もインドネシアとの結びつきが強まり、インドネシア工場の役割も年々重要度が増しています。

私自身、今後も社内における日イ橋渡し的存在として業務をこなしながら、個人的にもインドネシアとの縁が続いていけばいいなと思っております。

キャンパス便り

大阪大学人間科学研究科
グローバル人間学専攻　准教授　福岡まどか
（外国語学部インドネシア語専攻担当教員）

㊧裏方を含めたスタッフたち全員　㊦は語劇の1場面

語劇

11月1日に2年生によるインドネシア語劇『ミナンの地からの心の声 Suara Hati dari Ranah Minang』が上演されました。土曜日の午前中の時間帯でしたが、観客の入りもまずまずの状況で、同窓会からも多くの方々にお越しいただき、無事に上演を終えることができました。スマトラ島・ミナンカバウの民話『マリン・クンダン Malin Kundang』に基づくこの劇は、異郷の地で成功を遂げた主人公マリン・クンダンが故郷の母親を見捨て、その閉ざされた心のゆえについには石になってしまうという物語です。全体にややダークな雰囲気の演出でしたが、学生たちの熱演は素晴らしく、頑張る若者たちのエネルギーに心を打たれました。

同窓会からも様々な形でのご支援をいただき、大変感謝しております。インドネシア大学文学部のユスフ先生に脚本を依頼して3回目の上演になります。毎年、どの学年にも独特のカラーがあり意外な一面を見せてくれることも多くあります。脚本はシリアスなものからややコミカルなまで少しずつ蓄積が見られるようになってきました。今後の専攻語の大切な財産として、語劇のレパートリーを増やし、質的にも充実した上演を目指していきたいと願っています。

一方、今年の箕面キャンパスでの大学祭は、従来のような飲食販売が規制されたこともあり、各国の料理を売る学生たちの活気づいた様子が見られず、1年生がいないため、やや寂しい雰囲気でもありました。キャンパスが分散している現状の中で大学祭を含むさまざまな行事を実施していくことは、新生阪大の大きな課題のひとつであると感じました。

スピーチコンテスト

今年度のインドネシア語の快挙となるとやはり秋に行われたスピーチコンテストでしょう。10月に名古屋の南山大学でスピーチコンテストが行われ、インドネシア語からは2人の学生が参加しました。このコンテストはインドネシアでの滞在期間が半年以下という条件が定められており、長期の留学経験がない人たちが対象。2年生の西岡郁恵さん（写真は、賞状授与）が見事に優勝を果たしました。スピーチはアチェでの支援活動を通して感じたことを語ったものでした。

また11月には千葉の神田外国語大学でもスピーチコンテストがあり、ここでは長期の留学経験の有無によって 2 つの部門に分かれてコンテストが行われました。インドネシア語からはやはり2人の学生が参加し、3年生の福島亜里紗さん（写真㊨）が見事に優勝を果たしました。1年間のボゴール留学で仮面舞踊を習い、その経験に基づき伝統文化についてスピーチを行いました。

専攻語にとって嬉しい出来事でしたが、特筆すべきは外国人教師であるサフィトリ・エリアス先生に負うところが非常に大きいということです。参加者全員が、スピーチ原稿をサフィトリ先生に添削していただき、発音をチェックのうえ何回も練習を行ってからコンテストに臨みました。素晴らしいネイティブの先生の熱心なご指導。今後も学生たちには是非この教育環境を活かして頑張ってほしいと思います。

統合後の変化など

◆キャンパス移動

統合後の変化としては、私たち教員にとってはキャンパス間の移動が増えたことや担当する授業が増えたことなどがあります。授業や会議や入試業務などのために箕面、吹田、豊中と移動を続ける毎日です。学生にとっては、1年生が箕面にいないこと、クラブやサークルの活動場所の問題などがあるようです。

インドネシア語の授業に関しては、これまで通りに行っています。1年生の語学の授業だけが豊中キャンパスで行われ、他の授業はすべて箕面キャンパスで開講されています。今は教員も学生も、目の前の変化についていくのに精一杯の状況ですが、統合によるメリット、例えば図書館が増えたこと、他学部の授業への参加の機会が増えたことなど、活用できる点もこれから徐々に認識されていくことと思います。

◆卒論と就職

今年は、学部卒業生で卒論を書いた人が5人います。テーマは、バリ島のヒンドゥー、イスラームと婚姻法との関係、西パプアの民族主義運動、カリマンタンの華人、汚職に対する政策など、地域的にも分野的にも多岐にわたっています。

世間では就職難や就職内定の取り消しなどのニュースが多く聞かれる状況です。現在のところ、専攻語の学生たちの就職状況はおおむね良好のようです。メーカー、金融関係の就職先が多く、公務員になるケースも見られます。今年は、就職ではなく他大学への編入や阪大の他専攻科の大学院への進学を選ぶ人もいます。取り巻く社会状況は厳しいものではありますが、学生たちの輝かしい未来を願ってやみません。

◆共同研究室の活用

現在、B棟5階にある専攻語の共同研究室を片付けて、インドネシアに関する基本図書を備え付けるべく少しずつ準備を進めています。辞書や事典、語学の参考書、インドネシアに関する書物などを充実させていきたいと考えております。学生たちも掃除や片付け、書籍の整理などを積極的にしてくれています。共同研究室が、学生たちにとって気軽に集まり、多くの知識や情報が得られる場となれば…。

研究の方向性を模索した1年間

最後に私自身の研究について。もともとジャワ島の音楽や舞踊の調査を通じてインドネシアと関わってきましたが、インドネシア語専攻で教えるようになって5年。語学の他には芸術に関する講義、インドネシア文化の全般的状況に関する講義や文献講読などがあります。人間科学研究科の大学院や学部での授業もあります。

伝統芸能の伝承という問題が私の主たる研究テーマでしたが、関心は次第に東南アジアの演劇や舞踊にも広がりつつあります。6月には私も編集委員の一人となった『新版東南アジアを知る事典』(平凡社 2008年)が出ました。その他には、古代インドの叙事詩で東南アジア各地に広がったラーマーヤナについての研究を行いました。主人公のラーマ王子は妃シーター姫を魔王ラーヴァナに誘拐されてしまいます。猿の武将ハヌマーンをはじめとする猿の軍団の力を借りてラーマは魔王を倒してシーターを救出します。この物語はジャワ島やバリ島では影絵芝居や人形劇、舞踊劇（写真）の中で演じられています。特に観光客対象の芸能の中では頻繁に上演されます。インドネシアにはラーマーヤナのコミックもあります。

芸能研究を出発点として、物語にも関心が広がってきました。これからも授業を大切にしながら自分の研究の関心を広げていきたいと考えています。

寄稿 *Apa & siapa*

商社マンの華麗なる転身

風景写真家　中村　吉夫　（'65 卒）

黄山撮影中の筆者

外大インドネシア語卒業は1965年で、齢は既に67歳。トシをとったと思うも、老け込んではおれない。総合商社・ニチメン株式会社に入り、思うところあり定年前に依願退職。即、風景写真家としてプロ宣言した。以後約10年が経過し、今日に至る。我ながら摩訶不思議な人生を感じる。

記憶も定まらぬ幼時、家族と共に中国に暮らした。敗戦後は命懸けの逃避行。命ながらえるも悲惨な引揚げ、その後続く暗い苦難の少年期と青年期。何時しか中国は芒として忘却の彼方へ。ほろ苦いノスタルジアは私のＤＮＡに深く刻まれた…と今にして思う。辛い思い出を避けるかの如く、外大での専攻はインドネシア語。商社マンとして、寝食家族を忘れ、夜討ち朝駆け、東奔西走の日々、30有余年は瞬く間に過ぎた。

が、最後の海外勤務地、香港赴任を契機に、花鳥風月、山水画、水墨画の遥か懐かしい世界を、直接肌で触れることになる。衝撃的な邂逅は、体内の奥深く潜んでいたＤＮＡに引火、一挙に爆発炎上した。

中国・黄山

「桂林、黄山、九寨溝」という世界屈指の“中国三景”。その虜になるに時間は不要であった。気が付けば、不満なく、慣れ親しんだ商社マン人生に決別、未知なる世界に風景写真家として身を転じていた。1998年のことである。現代日本写真界の巨匠、竹内敏信氏との出会いも、私の背中を強く大きく押した。あっと言う間の、この間の出来事である。

中国・桂林

さて、風景写真家としての私のホーム・グラウンドであるが、まずは写真家人生の原点、心の故郷でもある中国。専攻語学、商社駐在員時代のインドネシア。慣れ親しんだ周辺の東南アジアの国々。アジアの大国インド。これを主戦場としている。昨年はアメリカへ脚をのばし、現在はＥＵ諸国も新たな対象として視線の先に…。

中国・九寨溝

米国・ブライスキャニオン

過去10年、平均1年の4分の1から3分の1、即ち3～4ヵ月間は海外を転戦する日々だ。いずれの国・土地でも、撮影対象は、自然風景、風物、歴史、文化、人々、世界遺産（自然・文化）である。風景写真家としての基本スタイルを通したい。未知の世界、風景、対象を前にファインダーを覗く自分に至福を感じる。

私の海外取材旅行は家内が助手として不可欠。写真撮影を除く、あらゆる相談相手である。夫婦二人の弥次喜多道中、海外一人旅ならぬ二人旅である。ただ、団体パック旅行とは一切無縁。仕事に取り組む前の雑事が多い。飛行機、汽車、バス、車、宿、食事等々、自らが予約し、手配する。商社員時代、全て会社組織による意思決定、行動、手配であった。異次元に等しく、隔世の感ありである。自己責任、明日への保障・確証は皆無。予知・予測が不可なる点、人生そのものである。海外での危険、リスクの予見には過剰に敏感である。常に細心の注意を怠らない。だから、危険にあった経験はない。小心者であることは幸である。食事は原則、殆ど現地食。日本食は食べない。現地食がベストという体に染み付いた確信である。

これまでに5回写真個展を開いた。年最低1回の写真展開催を目差している。今年も、奈良で5月の連休期間中開催する。興味、関心を頂ければ、是非ご笑覧願いたい。

最後に写真について一言。写真は実に素晴らしい。ズブのド素人の自分が、独学、我流でここまで来た。写真のお陰のオマケの人生。その実感も充分に愉しませて貰ってもいる。是非写真をお試しあれ…。チョット気合を入れて、突っ込んで。だが、ご注意を。“写真は写す人そのものを写し出しますぞ”…。

インドネシア・ボロブドゥール遺跡

☆写真展のご案内

中村吉夫「中国・黄山展」

会期:21年5月4日（月）～5月10日（日）
場所:入江泰吉記念奈良市写真美術館（奈良市高畑町600-1　http://www1.kcn.ne.jp/~naracmp/）
展示作品数:全紙/全倍で約25点
☆中村吉夫の Web Site “Photo-Yoshi”は http://www.f6.dion.ne.jp/~yosikayo/

ジャカルタ発

日本人らしく

里　真吾　('02 卒)

「日本食を食べないと、顔が日本人の顔じゃなくなるよ」。以前勤めていた会社の、海外での駐在経験が豊富な大先輩に言われた言葉です。これを思い出したのは、先日、南ジャカルタにある 25,000 ルピア均一のダイソーで買い物をしたとき。レジの係員が、私の前の日本人客には「アリガトゴゼマシタ」と言い、私に対しては「Terima kasih」。私の顔（外見）が日本人に見えない（?）。ということは、中身も少なからず日本人から遠ざかっているということでしょう。

自己紹介が遅れました。里真吾と申します。在学中の 2000 年、インドネシアに留学し、2002 年に卒業しました。その後、民間企業に約 6 年勤めていました。留学中に知り合った、とあるインドネシア人の面倒見のよさに驚嘆し、卒業後も、旅行や出張で毎年欠かさずインドネシアに顔を出していました。前職も嫌ではなかったのですが、自分が本当にしたいことは何か、考え抜いた結果、転職を決意。昨年 8 月から、ジャカルタにある Bina Nusantara という大学（写真）で、研修プログラムの講師として日本語を教えています。

研修生は 20 人。彼らは 1 年ほど日本語を勉強し、日本語能力試験 2 級レベルの試験に合格すれば、日本でエンジニアとして働くことができます。「日本語能力試験 2 級」のレベルですが、例えば漢字に関して言えば、日本人が小学校の 6 年間で習う漢字の数と、試験の範囲に入っている漢字の数がほぼ同じです。漢字だけでも、研修生たちにとってかなりの負担になることをご理解いただけると思います。ただ、試験科目は漢字以外に、語彙、聴解、読解、文法があります。

日本語を勉強する側からすれば、恐らく、外見も中身も日本人という教師に教わりたいと思います。今後も日本語教育の分野で仕事を続けたいと強く思っていることもあり、日本人らしくいたいのですが…。

研修生や他の先生と（筆者は前列㊨から2人目）

日本食を食べる機会はあまりありません。家の周りにも職場の周りにも、本格的な日本食を食べられるところは無く…。日本食が恋しくなったら、家でノリの佃煮「ごはんですよ」や“ふりかけ”をインドネシア米といっしょに食べて済ませることが多いです。

日本人と交わる機会もあまりありません。職場にいる日本人は私 1 人。さらに、昨年末からムスリムの家庭でホームステイをしています。日本人と交わるどころか、ジャカルタの日本人社会から遠ざかっている感すらあります。

日本食についても、日本人との交流についても、機会は作るものだと言われればそれまでですが、緊急ではないため、ついつい後回しになってしまっています。

そんな私にとって、南十字星会の食事会は、なくてはならないものになっています。毎回、おいしい日本食を楽しめます。ホームステイ先では口にできないお酒を堂々と飲むこともできます。そして何より、諸先輩方の貴重なお話を伺うことができます。

インドネシアに住んでいるからには、インドネシアの生活をもっと知りたい。その思いからホームステイを始めました。一方、やはり日本人らしさも忘れたくない。このぜいたくな願いを 2 つとも叶えられる環境。こうして改めて書いてみると、本当に恵まれているなあ、と感謝の気持ちでいっぱいになります。

今後はインドネシアでの経験を足がかりに、日本語教師を育てる仕事をしたいと思っています。とはいえそれは先の話。南十字星会の食事会を活用させていただき、日本人らしい顔を保ちつつ、今は目の前の研修生たちの日本語能力を向上させることに全力を尽くすのみです。

寄稿　Apa & siapa

戦地のジャングルで
私が倒した大蛇と巨象

三宅　勇　('42.9 卒)

脳梗塞で倒れながら九死に一生を得て、いま療養生活を送っています。九死に一生を得た経験は、60 年以上も前にもありました。大阪外国語学校の卒業時は太平洋戦争の戦局が激化し、私も戦争に参加したのです。

当時の学長から東京の陸軍参謀本部に行くよう指示を受け、即「陸軍通訳官」に。そして出征。敵潜水艦の追尾を振り切ってシンガポール入り。そこで 1 カ月滞在しました。さらにマレーシア・クアラルンプールの「警備隊司令部」から「定兵団」に配属換え。タイとマレーシアを繋ぐマレー半島の最狭地域「クラ地峡」を警備するための“特務機関員”に任ぜられました。ここで紹介するのは、その頃の話です。

出征前、覚悟を決めて撮った「記念の写真」

クラ地峡（Isthmus of Kra=地図は Google マップから）は英軍の上陸する可能性が高く、その場合われわれ特務機関員 4 名は英軍の陸揚げした兵器・弾薬・食料を爆破しなければなりません。重要かつ危険な任務なので決死の覚悟が必要でした。ジャングル内の獣道を知り、秘密ルートを探すため、あちこち歩き回りました。日本軍の食糧を確保する御用商人を装い、現地の人たちに、彼らの欲しがる物資を提供。イザというときに備え“協力してもらえる態勢”をたえず心がけていました。

私はジャングルに行くときは半長靴、助手のタイ人は素足でした。「ミー・ヤーイ」（大きい蛇）という叫び声がして、突然の大蛇との遭遇です。

6 ㍍を超す蛇が、地面から直立した木に登り、逃げようとしています。助手に持たせていた英軍からの押収小銃を構えました。蛇は胴を左右に振りながら地面を這うものと思っていました。ところが、ジャングルには 1 ㍍もの高さの雑草が生い茂り、大蛇の方も逃げるには木の上と思ったのでしょうか。太い胴体を木に巻きつけながら、ゆっくりと不気味な動きです。大蛇の頭が私の目の前に来たとき、引き金を引きました。大蛇の首は横に垂れましたが、胴体は立ち木に巻きついたまま。助手が尻尾を持って巻き戻すと、ドサッと地面に落ちました。

タイの人は内臓を欲しがります。市中の中国人の薬種商に持っていくと高く売れるからです。その代わり「皮はきれいにする」と。翌日、ジャングルで見た皮は、その言葉通りでした。何千万という赤蟻が集まってきて“きれいに”皮を残し食べてしまったそうです。記念の皮は終戦時に押収され、なくなりました。

巨象と出合ったのはそのあとです。隣村の中国系の代表者が「収入源のバナナを象に根こそぎやられて困っている」と相談を持ちかけてきました。私は、若さと外語魂を揺さぶられて、何とか対処することを約束しました。ただ、小銃があるとは言え、タイの野生の雄象を退治するのは初めてで、少し心配でした。小象は竹で叩けばすぐ逃げ去ります。しかし、雄象は交尾期が済むと群れから離れて食物を探し、とても凶暴な習性があり、象牙も武器です。

その巨象がいました。80 ㍍ぐらい離れたところから射撃を開始。弾が当たっても平気でバナナを食べています。恐ろしい気がしました。注意しながら連射。計 16 発目に動かなくなりました。新品のマサカリを村人に渡しました。象牙を取るには、頭蓋骨を割らねばならず、マサカリの刃はつぶれてしまったそうです。

ジャングルの中では体中に油を塗って踏み込んでも、吸い付いてくるヒルには散々悩まされ、貧血状態になったことも度々でした。振り返ると私の戦いは、敵兵ではなく、日本では想像もつかないような熱帯のジャングルと、その中の生き物たちでした。

米寿が過ぎた今、自分の身を守るためとは言え、ジャングルで殺傷してしまった動物たちのために仏像を彫り、その冥福を祈る仏心が出てきた今日この頃です。

2008年度　総会　バリ舞踊を堪能

☆☆　総会式次第　☆☆
08年10月18日正午～
新阪急ホテル

開会の辞・司会　片山　秀樹（90卒）
物故会員への黙祷
会長挨拶　山口　寛（58卒）
来賓挨拶　教員松野　明久
福岡まどか
原　真由子
乾杯　西村　耕二（56卒）
****食事・懇談****
関東支部長挨拶　朝倉　俊雄（67卒）
バンドン生活　大田中　実（63卒）
特別公演
バリ舞踊　田中　千晶（90卒）
会報報告　岩谷　英志（64卒）
歌唱指導　渡辺　重視（64卒）
在学生紹介
閉会の辞　小原　一浩（63卒）
写真撮影

南十字星会の2008年度総会が、10月18日正午から大阪市北区の新阪急ホテルで開かれた。新生・大阪大学となってから初の総会。出席者は53人にのぼり、3人の先生方と多くの現役学生を迎え、和やかに交流。踊り、歌、トークで大いに盛り上がった。

山口寛会長が冒頭にあいさつ。「母校あっての南十字星会です。語部の縦の繋がりを含めた同窓会活動の活性化には、05年に発刊した会報が大きく寄与しており、これを核に会員情報の把握にも力を注ぎたい。今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願いします」と述べた。

ジャカルタ支部からのメッセージも披露された。「毎月1回ぐらい会員が集まって情報交換をしています。次回以降の会報にも面白い話を報告させていただきます」

メーンの催しは田中千晶さんのバリ舞踊公演。きらびやかな豪華衣装に身を包み、ガムランの旋律に合わせた踊りで、会場はバリの神秘的なムードに包まれた。

恒例の歌合唱ではおなじみのBengawan Soloなど、楽譜を見ながらしっかりと。古い時代の外大名物「きんきら節」もインドネシア語版が紹介された。

約3時間。最後の記念写真は「みなさん笑顔でした」。

田中さんの踊りのタイトルは「Taruna Jaya」（勝利の若者）。女性が男装をし、若者の感情の移り変わりを、曲に合わせて表現していくものだった。「一般に宗教儀礼の中でトランス状態で舞う踊りをルーツに持つものが多いのですが、これは宗教儀礼とは別のところから生まれたものです」

大学在学中から興味を持ち、卒論も“バリ舞踊”をテーマにした。卒業後に留学して、帰国後95年に大阪府豊中市内で舞踊教室「プルナマ・サリ」を開設。今もバリに短期旅行を繰り返し、研鑽に励んでいる。

「バリの踊り子は、かつて村の人たちが素質のある子を見つけ、よってたかって育てていました。今では、教室通いが普通になっています。バリの人たちは競争好きです。デンパサールに60以上の教室があり、子供たちは踊りコンテストに参加しながら、切磋琢磨しています」と、現地の舞踊事情も披露した。

☆投稿のお願い☆　第9号は09年10月に刊行の予定。投稿をお待ちしています。テーマ自由。1300字程度。カラー写真添付を。あて先は岩谷英志
Eメール rocky3@wombat.zaq.ne.jp
《住所》〒563-0029 大阪府池田市五月丘2-5-113-402
(Tel＆Fax 072-753-1693)

現役生交えて盛り上がる

《松野明久先生》8月にアチェを訪問。南十字星会のご支援が呼び水となって出来た「女性福祉技能センター」は、立派に運営されています。新生の大学は、つまずきもなくスムーズ。今後、カリキュラムの充実や現地との係わりなど、ファシリテーションも十分考えていくつもりです（国際公共政策研究科）。

《福岡まどか先生》人間科学研究科のグローバル人間学専攻に所属しています。新入生を含め非常によく勉強する学生ばかりで、その点はご安心を。

《原真由子先生》統合後、世界言語研究センターに所属しています。学部の授業は今まで通りやっています。これからもよろしくお願いします。

《朝倉俊雄・関東支部長の挨拶》卒業後、大阪・神戸に計11年いましたので、懐かしい気持ちです。支部でも幹事仲間で運営しており、年代層は広いですが、年1回の懇親会は楽しみにしています。(総会後の感想=母校を身近に感じ、総会はとても新鮮でした。学生生活の一端もうかがえ、しっかりした学生諸君に会えて、何となく安心しました)

《大田中実氏の「バンドン生活」》

赴任したのは1965年。スカルノ大統領失脚のきっかけとなった9・30事件の10日前。「えらいところへ来た」という印象でした。インフラは未整備だし、日本食レストランもない。

でも、しばらく暮らすと「これはいいところだ」と。物価が安い。涼しくて風光明媚。公害もない。花が咲き乱れ、Kota Kembangそのもの。単身赴任でも、身の回りのことを頼める人がいる。現地の人の心も良さも伝わった。「1年ではもったいない!」。会社からの要請で、将来計画も立案…。

気がついたら30年です。話が本当か、確かめに行ってみてください。

消息　ひとこと（敬称略）

六岡康二（39卒）=兵庫県宝塚市
卒業後、国策会社の南洋拓殖に入社。マレー作戦に参加し、負傷して帰還しました。でも敗戦で、南方雄飛は消え去りました。戦後はインドネシア語とは無縁の職場でした。単語もほとんど忘れています。卒寿の今、辞書を引っ張り出して勉強を再開。これが結構、老化防止に役立っています。

鶴田　康（42卒）=東大阪市
上本町校舎が懐かしいです。今パソコンでマレー語の単語にたまに面会しています。

川邊喜代作（43卒）=京都市上京区
外語のことを随分昔と思う昨今です。お世話になった諸先輩、恩師がしのばれます。

板坂勇夫（47卒）=東京都杉並区
82歳、まだボケていません。日イ協会で情報の収集・分析に精出しております。

高橋良一（49卒）=兵庫県西宮市
ジャカルタ4年、豪州で通算28年。06年に帰国。自由の身となり元気で居ります。

吉田勝博（50卒）=福岡市早良区
40年以上大阪に住み、福岡に帰郷後、郷土史などを勉強しております。

岡田　弘（56卒）=大阪市住吉区
08年6月末で40数年勤めた広田証券(株)を退職いたしました。

粕谷俊樹（62卒）=大津市
長年、外大で教鞭をとられたアイプ先生の自伝「Hidup Tanpa Ijazah」を翻訳しています。1300頁の大冊なので、完成まで寿命がもつか？途中でコケたら、有能なる後輩諸君、よろしく！

松岡正勝（63卒）=堺市
腎臓、肝臓がんを治療中。南十字星会の益々の発展を祈ります。

山下勝男（66卒）=さいたま市
「南十字星」に目を通していると、先輩・同僚・後輩の皆様が何年たっても外大及びインドネシアに対する深い愛情を持ち続けておられることを改めて感じました。小生は05年末にインドネシア隣国のパプア・ニューギニア大使勤務を最後に退官し、現在は中国との文化交流事業をやっている公益法人で仕事しています。健康なうちに皆様とどこかでお会いできるのを楽しみにしています。

鈴木安夫（66卒）=堺市
第7号で同期の扇谷氏の寄稿文に接し、懐かしく、励まされました。

渡邉悠三（69卒）=千葉県浦安市
08年6月に完全リタイア。目下、学びごと・習いごとに取り組んでいます。

床次泰文（70卒）=埼玉県蕨市
07年8月に定年退職しました。

安藤律男（79卒）=東京都江戸川区
現在、バンドンのBNP銀行に駐在しています。

伊勢崎昭弘（03卒）=東京都立川市
MalaysiaやCambodiaのほか最近はJakarta出張もちらほら増えてきました。

◆おくやみ申し上げます◆

水落　功（39卒）
＝大阪府枚方市　08年1月死去
八百　脩（41卒）
＝大阪府高石市　08年6月死去
饗庭秀夫（46卒）
＝神戸市　06年10月死去
橘　俊二（47卒）
＝大阪府高槻市　07年2月死去
喜田　武（53卒）
＝横浜市　06年1月死去
宮川虹児（58卒）
＝大阪府茨木市　09年1月死去
上野正義（59卒）
＝名古屋市　06年死去